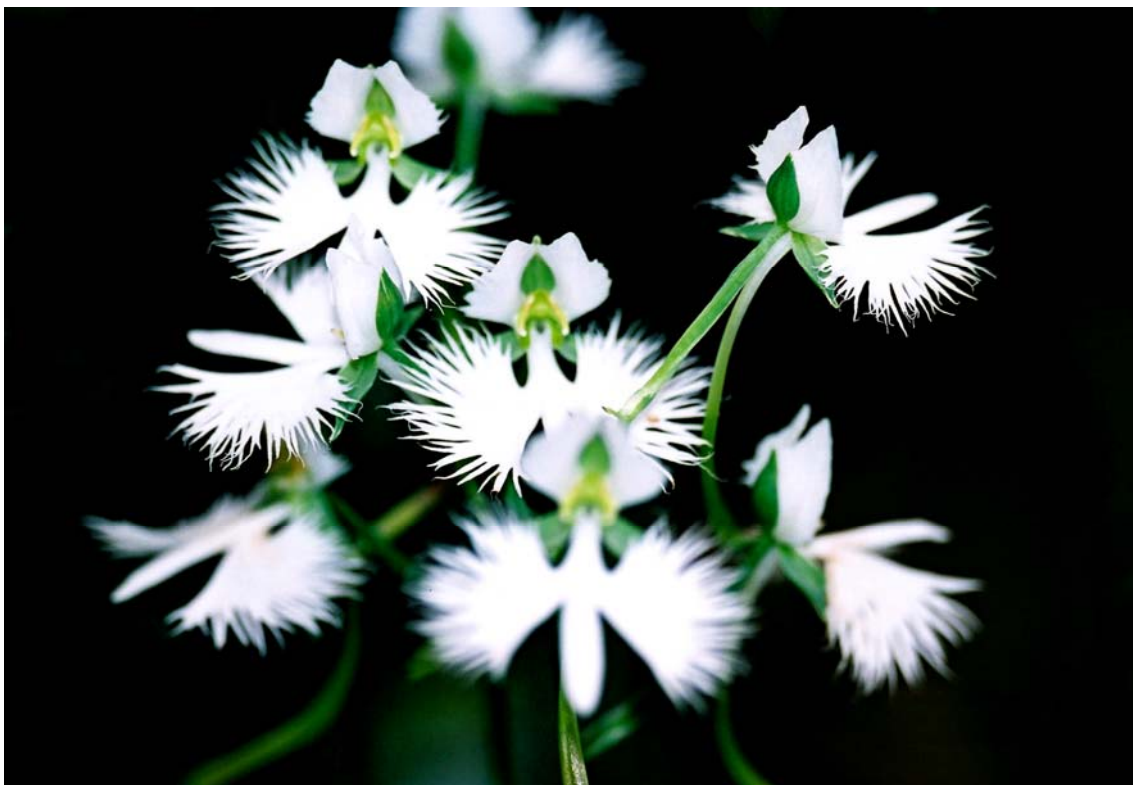


8) サギソウとトキソウ＝鷺草と朱鷺草／鴝草

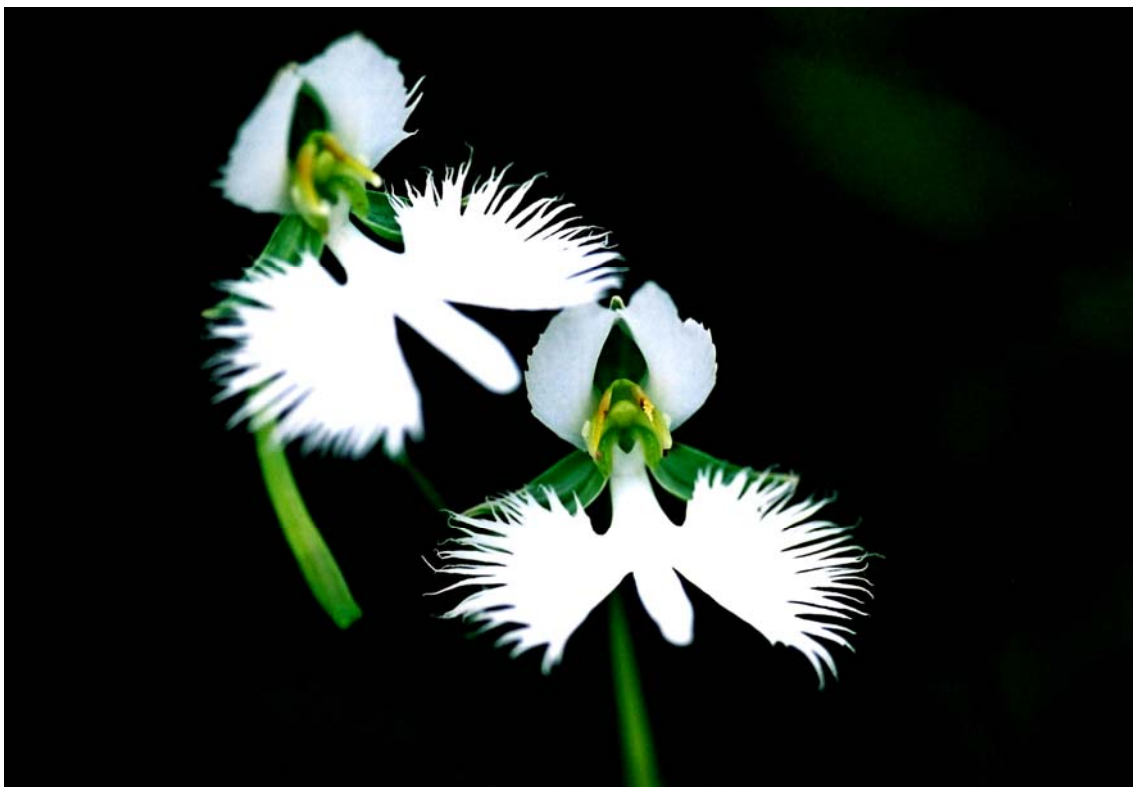
サギソウもトキソウもラン科の多年草である。どちらも実に巧みなネーミングで、特に鷺草に関しては自然はなんと巧みに、鷺の形を真似るのだろうと感心させられる。中国では『鷺毛玉蘭花』と言い、これは和名の鷺草にはとうてい及ばない。鷺は雁のことで、鷺毛とは鷺鳥の羽毛のことを意味し、白くて軽いことから雪にたとえたり、軽少の意味を表すことも多い。鷺草は本州から九州の湿原地帯などに自生し、現在では園芸化されて、もっぱら鑑賞用として栽培されている。草丈は15～40cmで、根は塊茎となり7～8月頃、茎頂に2～3個、純白の美しい花をつける。花には大きな距があり、後部に大きく垂れ下がる。鷺草がまとまって咲く様子はまるで白鷺が群れ飛ぶようで美しい。このためツレサギソウなどともいう。園芸品種には葉に斑の入ったものなどもあり、1681年に表わされた『花壇綱目』にはその記述がある。江戸時代にはすでに広く愛培されていたのだろう。

鷺草は陽当たりと湿り気のあるところを好み、育てるには水苔が最もよく、毎年秋に掘り上げて暖かいところに保存し、春には新しい水苔に植え替えるのがよい。肥料は油粕でもよいが、余程よく発酵してないと根を腐らせてしまうことも多いので、薄い液肥を適宜与えるようにするのも一つの方法である。

一方の朱鷺草は高さ15～30cmで、葉は1枚が茎の真中へんに出る。6～7月頃茎の先端に花径2～3cmで淡紅紫色の可憐な花を1個咲かせる。唇弁は3裂し毛状の突起が密生する。地下には細長い茎が這い、所々から芽を出して殖える。温帯から亜寒帯の湿原地帯に生え、日本では北海道から九州に、また朝鮮や中国にも分布する。近縁のものはヤマトトキソウと北アメリカに産するものしか確認されていない。これはその昔日本列島が、アリュウシャン列島やアラスカを経由して、アメリカ大陸に繋がっていたことを暗示している。日本人とアメリカインディアンの文化が、極めてよく似ていることと、大いに関係がありそうである。和名の起こりは朱鷺(トキ)に似ているところから名付けられた。ところでそのトキの仲間は温帯から熱帯に分布し、絶滅が心配されている。朱鷺は学名『*Nipponia nippon*』といい、江戸時代から明治時代までは日本の各地に普通に見られた。しかしその後急激に減少し現在では日本の他は中国北部、朝鮮半島、沿海州などに生息するのみで、その数は極めて少ない。1986年佐渡にあるトキ保護センターには2羽が飼育され、中国から贈られたものと合わせて3羽がいたが、これもやがて年老いた雌の一羽となってしまう、絶滅はもはや時間の問題だった。しかし中国から贈られたツガイから新しい朱鷺が誕生し、日本でも最悪の事態は免れた。また中国の陝西省秦嶺山地に繁殖する個体もあり、辛うじてこの地球上から消えることは回避されている。人間の身勝手な論理と横暴により、この地上から消えた生き物は数知れない。動物に限らず植物も含めて、全てが地球家族であることを再認識しなければならないだろう。



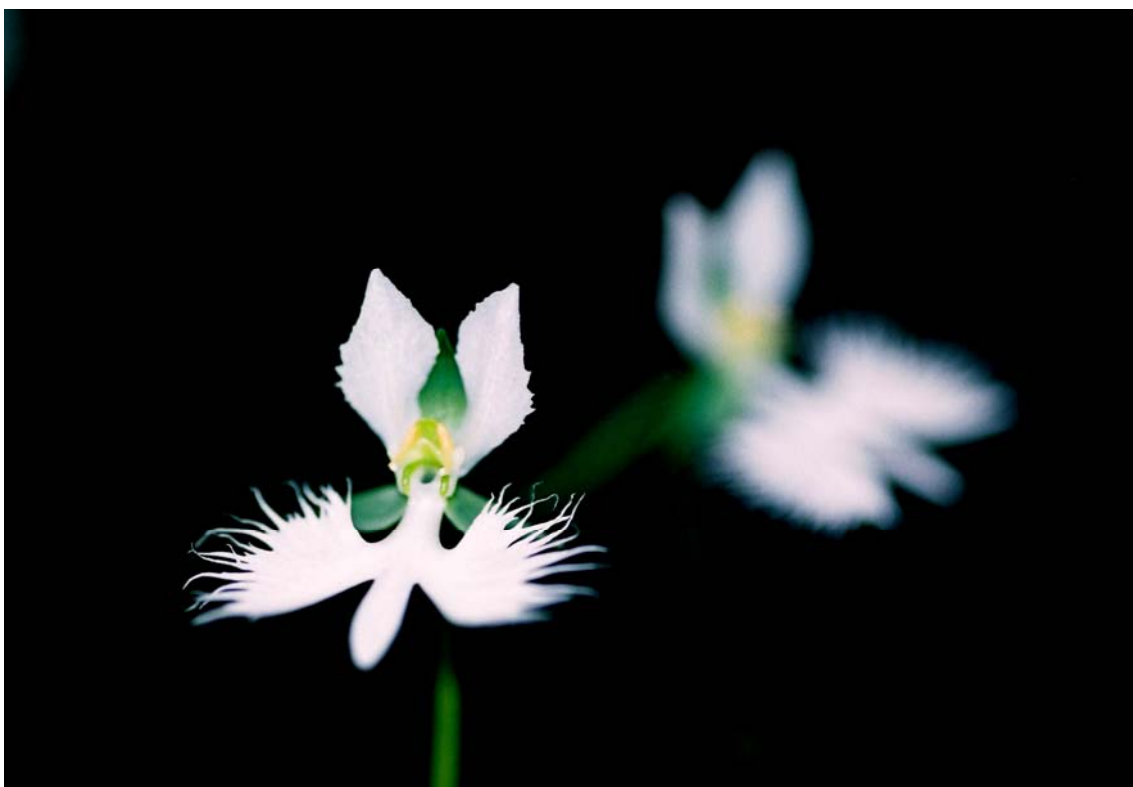
こうして見るとサギソウの異名ツレサギソウが理解できる。それにしても自然は他のものの形をうまく真似て、違うものを作り出すものだと感嘆せずにはいられない(栽培品)。



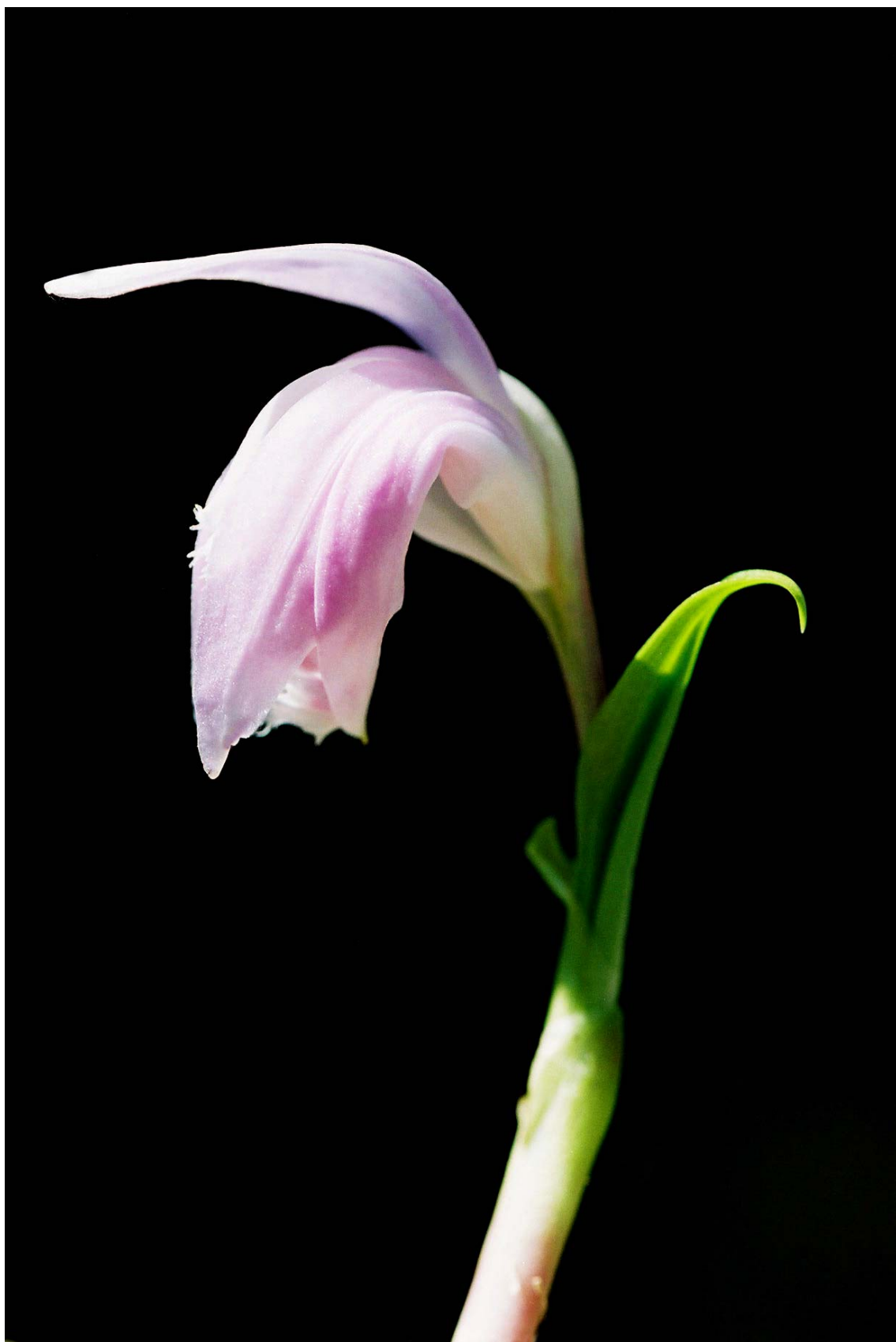
正にツガイの驚である(栽培品)。



大空を飛翔する鷺の姿そのものである。夜になると芳香を発し、緑色の長い距の末端には蜜が溜まるようになっている。この蜜におびき寄せられた昆虫が受粉を助ける(栽培品)。



このツガイのサギソウは、一体どこへ飛んでゆくのだろう(栽培品)。



咲き始めたトキソウの花(栽培品)。



トキシウは朱鷺が大空を羽ばたくイメージから名付けられた。なるほどこうして見ると、サギソウと同様に、巧みなネーミングということになるのだろう(栽培品)。



トキシウも乱獲がたたり激減している。朱鷺にならないことを祈るばかりである。



テガタチドリは高山性のラン科植物で、和名の由来は花の形状が、千鳥が飛ぶ姿に似ていることに由来する。ユーラシア大陸北部に分布し、日本では北海道から中部山岳地帯の草原に自生する。学名は『*Gymnadenia conopsea*』で、7~8月頃開花する(長野県霧ヶ峰高原)。



ハクサンチドリも前種と似た環境で生育するが、通常は赤紫色の花を咲かせる。これは園芸店で売られていたもので、白みを帯びており花穂の丈もかなり小さい。学名は『*Dactylorhiza anstata*』、和名の由来は、白山に多く生息し、全種同様、花の姿を千鳥に例えたものである。



これはユリ科のツバメオモトで、北海道から奈良県にかけて、亜高山帯の山林内に分布する。オモトのようにテカリのある大きめの葉が根生し、瑠璃色の果実がツバメの頭に似ているためこの呼称となったという。各地で絶滅危惧品種に指定されており、学名は『*Clintonia udensis*』である。連休が過ぎたころ亜高山帯の路傍で写真のような花を咲かせるが、こうして見てゆくと、鳥に例えられた植物は意外に多い。

[目次に戻る](#)